

## 2023年3月5日 No.3657 商法上掲載

先週の講壇から

「私もその中に…」

マルコによる福音書 14章 32節~42節

聖句「イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。』」(14:33,34)

1. 《涙を舐め取る猫》 「猫」の語源は「寝る子」と言われる程、猫という動物は一日の大半を微睡みつつ過ごすのですが、そんな猫が絶対に寝ないで起きている時があるのだそうです。後輩の女性牧師Aさんが、チビという猫と暮らしていた時代のこと、チビは彼女の目に涙を見つけるや、それが何の涙であれ「涙という涙は悉く拭い取って上げる」とばかりに舐め取っていたそうです。
2. 《死ぬ程の悲しみ》 人間には悲しみの時に、その悲しみを共に分かち、寄り添ってくれる存在が必要です。独りで悲しみには耐えられないのです。この「ゲツセマネの園」では、神の御子イエス・キリストと雖も、悲しみに耐えるために誰かを必要としたのです。イエスさまは痛み悲しみを何も感じない、ロボットや無感覚人間、超人や解脱者として生きられたのではなかったのです。イエスさまは「私が祈っている間、あなたたちも目を覚まして、せめて祈りの時を過ごして欲しい」と、信頼する弟子たちに頼みました。けれども、そんなイエスさまの求めに、弟子たちは応えることが出来ず眠りこけていたのです。《共にいて下さい》 側に誰もいないのも寂しいですが、すぐ側に見知った者がいても、喜び悲しみを分かち合えないことの方が辛いのです。イエスさまがゲツセマネに伴われたのは「山上の変貌」の際にも伴われた3人です。弟子たちの中でも、特に信頼を置いているペトロ、ヤコブ、ヨハネでした。「あなたのためには火の中、水の中」「あなたと共にどこまでも」と宣言していた弟子たちです。しかし、この時は眠りこけ、捕縛の際には蜘蛛の子を散らすように逃げ、拳句に関係を否認するのです。やがて主は十字架の上で、神に見捨てられるという徹底的な孤独も味わうこととなります。このような孤独を味わい尽くされたイエスさまが、私たちに仰るのです。「私は世の終わりまで、あなたがたと共にいる」と。

朝日研一朗牧師